

——故・山野浩一さんに捧ぐ

1

いつの間にやら広がった噂——。街にはXが居るといふ。住民の誰に訊いても、それは変わらない。必ず、「ええ、居るそうですよ」と同じ答が返って来る。困るのは、誰の言葉も皆、決まって伝聞の形を採っており、Xがどんなものなのか、遭うと不幸になるとか、家路に就く幼稚園児を狙うとか、はたまた、じつと立ってこちらを見詰めているとか、そういった特徴が全く伝えられていないことである。この手の話に付き物の、「誰それが追い掛けられた」とか、「どこそこの路に現れた」との情報もない。そもそもどんな形をしているのか、人のようなものなのか、四足の獣なのか、或いは不定形の微生物に似ているのか、それすら誰も知らないのだ。まるで、「ただ、この街に居る」といふ、その事だけがXの本質であり、存在意義でもあるかのように——。だが、それでも街の人々は、Xの存在を露程も疑っていない。何となれば……この街には実際、Xが居るからである。